

富山県の誕生と入善町の発展

～郷土の発展に尽くした米澤家～

米澤記念館では、令和5年度の企画展として、「富山県の誕生と入善町の発展～郷土の発展に尽くした米澤家～」を開催します。

近世初期入善町に定住した米澤家は、屋号を「米屋」と称しました。宝永年間(1704～11)、総本家米屋四郎右衛門の三男与四郎が分家したのが、今日に続く米澤家であり、地方の名家として当主たちは、代々、政治、経済、文化のあらゆる方面で活躍してきました。

令和5年は、入善町合併70年、富山県置県140年という節目の年ですが、米澤家は富山県の独立と入善町の発展にも大いに尽力してきました。

6代目紋三郎元義は、¹山廻役や²十二貫野御仕立開主附、³新川郡新田才許となり、平十村並みの扱いを受けました。また、茶道、華道をたしなむ文化人で、日本に輸入されてまもない写真を写すハイカラ趣味の持ち主でもありました。

そして、9代目紋三郎元随は、石川県から富山県を分離独立させた立役者であり、「分県の父」と呼ばれていることは周知の事実です。また、その長男元健は、政治家として入善町政に多大な功績を残しています。

今回は、米澤家に残された入善町や富山県の歴史にまつわる資料を展示します。

会 場	米澤記念館
会 期	令和5年6月 15 日(木)～令和6年3月 19 日(火)
開館時間	午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで)
休 館 日	水曜日、年末年始(12月29日～1月3日)
観 覧 料	無料



¹ 加賀藩山奉行の下で山林行政を担当した役職。

² 加賀藩直轄の十二貫野用水開発責任者である役職。

³ 加賀藩の農政役人で、新田開発や畝下年季、免相(年貢率)を定める役職。

展示品リスト

資料名	和暦	形態	備考
勲四等旭日小綬章	明治39年4月1日	—	9代目米澤紋三郎
勲記	明治39年4月1日	用紙	9代目米澤紋三郎
勲五等双光旭日章	昭和39年4月29日	—	10代目米澤元健
勲記	昭和39年4月29日	用紙	10代目米澤元健
境御塩日記	文政13年4月4日～9月11日	横半帳	4代目米澤与四郎
新川郡十村歴代書上申帳	天明7年	袋綴	—
先祖由緒并一類書上申帳	弘化2年11月	用紙綴等	—
藪内古儀茶道入門式相済証	文政3年3月8日	折紙	6代目米澤紋三郎
永々被下米之義被仰渡候節勤向等品々覚書	天保13年4月	横半帳	6代目米澤紋三郎
立山御林見廻当番十六ヶ村肝煎役割	嘉永～慶応	長帳	6代目米澤紋三郎
県会議員出会の義に付御届	明治15年10月4日	罫紙	9代目米澤紋三郎
岩倉具視との面談日通知	明治15年10月31日	続紙	9代目米澤紋三郎
領収書	明治15年10月31日	切紙	9代目米澤紋三郎
分県之建白	明治15年	パネル	9代目米澤紋三郎
徽章 第8回衆議院議員	明治36年～37年カ	—	9代目米澤紋三郎
徽章 第9回衆議院議員	明治36年～37年カ	—	9代目米澤紋三郎
新潟県雨池開拓図	明治カ	続紙	9代目米澤紋三郎
蓋付硯	明治～大正	硯石	—
明治天皇北陸御巡幸米澤家下賜目録	明治11年	一紙	8代目米澤紋三郎
明治天皇御小休所平面図	昭和10年2月25日	用紙	8代目米澤紋三郎
明治天皇御小休所標識柱竣工清拔式	昭和10年5月17日	用紙等	8代目米澤紋三郎
米澤元健	明治44年ごろ	写真	10代目米澤元健
シンガーミシン講習会規則	明治44年7月	印刷物	10代目米澤元健
おこたへ感謝状	明治44年8月11日	折紙等	10代目米澤元健
私立米澤図書館閲覧室シンガーミシン講習会	大正2年カ	写真	10代目米澤元健
特設電話創設に関する書類	明治44年10月～45年4月20日	罫紙等綴	10代目米澤元健
入善局特設電話番号表	明治44年カ	印刷物	10代目米澤元健
衆議院議員候補 米澤元健推薦文	大正13年4月	用箋	10代目米澤元健
当選証書	昭和14年9月27日	一紙	10代目米澤元健
加賀藩の十村制度	昭和31年	—	10代目米澤元健
米澤元隆	昭和6年～7年	写真	米澤元隆

4代目米澤与四郎元清

〈明和8(1771)～天保10年(1839)〉

新川郡山廻役、境出来塩人等を勤め、芭蕉系北枝の流れを汲む俳人であった。当時、越中地方の中でも製塩業の盛んだった境村(現朝日町境)に赴任し、塩の出来高を「境御塩日記」に記録している。

6代目米澤紋三郎

米澤紋三郎元義(隱居名 四郎)

〈文化6(1809)～明治9年(1876)〉

分島の父として知られる9代目紋三郎の祖父であり、加賀藩政のころから、新川地域において数々の役職をつとめた。「先祖由緒并一類書上申帳」にはその詳しい来歴が記され、山廻役¹や十二貫野御仕立開主附²、新川郡新田才許³となり、平十村並⁴の扱いを受けたことが分かる。また、華道や茶道をたしなむ文化人でもあり、茶道 藪内流⁵の入門許状が残っている。

7代目与四郎元通が早世したため、8代目紋三郎元寛と9代目紋三郎元随はこの祖父の薫陶を受けて育った。

8代目米澤紋三郎

米澤紋三郎元寛

〈嘉永4(1851)～明治14年(1881)〉

9代目紋三郎の兄であり、石川県会議員を務めたが、30歳で早世している。明治11年(1878)、明治天皇ご巡幸の際には、御小休所を建て、天皇をお迎えした。

¹ 加賀藩山奉行の下で山林行政を担当した役職。

² 加賀藩直轄の十二貫野用水開発責任者である役職。

³ 加賀藩の農政役人で、新開所の管理、新開可能地の調査などを担当した役職。

⁴ 加賀藩の農政役人、十村制度における役職のひとつ。百姓でありながら年貢収納など農政・民政を任され、数十ヶ村を支配した。

⁵ 「茶道流派の一つ。江戸時代を通じて西本願寺の庇護を受けてきたため、利休以前の古風な茶の形態を保つ」(『日本大百科全書』昭和63年、小学館より)

入善御小休所について

明治天皇の北陸道および東海道の諸県巡幸が、明治11年(1878)8月30日から72日間行なわれた。

9月29日午前7時、泊の行在所をたたれ、午前8時10分、入膳村の米澤紋三郎(8代目)家で小休されている。建物の正門や御殿は現在、入善神社の隣に移築され、明治記念館として保存されている。

9代目米澤紋三郎

米澤紋三郎元隨

〈安政4(1857)～昭和4年(1929)〉

米澤紋三郎は、安政4年(1857)、入善町の大地主米澤家の次男として生まれる。幼名は隨作。富山藩の儒者岡田呉陽の塾に学び、17歳にしてその塾頭となる。西米澤家の養子となっていたが、明治14年(1881)1月、兄の8代目紋三郎の急死により復籍、9代目紋三郎として家督を継ぐ。

当時、越中全域は石川県に属していたが、越中人民の声が県政に反映されず、不満が募っていた。そこで越中改進黨が結成され、明治15年(1882)政府に分県を求める請願をすることとなり、25歳の紋三郎が富山の入江直友とともにその総代に選ばれた。

紋三郎は、精魂を傾けて「分県之建白」を起草。同年9月、入江直友とともに上京、岩倉具視、山県有朋、山田顕義らの政府要人に粘り強く陳情を重ねた。その結果、明治16年(1883)5月9日、太政官達が発せられ石川県からの分県が決定し、富山県が誕生した。

県内屈指の豪農であった米澤家ではあるが、県政界のリーダーとして分県運動などに多額の私財を費やしたため家政が傾き、明治20年(1887)紋三郎は、負債整理のため一時公務を辞した。その後、明治36年(1903)衆議院議員に最高点で当選を果たし、国政にも参加した。

富山県の生みの親として県政に尽くした功績は永く県民の讃えるところである。なお、紋三郎の菩提寺は米澤記念館そばの養照寺である。

富山県の分県

王政復古の大号令により樹立した明治政府は、国内を統一し中央集権国家を確立するため、反体制の打破に着手した。明治2年(1869)の版籍奉還後、同4年(1871)には廃藩置県を断行。各府県に、政府が任命した府知事・県令を派遣し国内の政治的統一を完成させる。その後、明治政府は、府県の統合による「大県」主義を貫くことで財政負担を軽減しようとし、同9年(1876)4月、その方針に沿って新川県は廃され、越中国は8月

に越前国をも含む「大石川県」に統合された。

越中の人々にとって、この体制は、旧加賀藩時代の金沢による支配を改めて想起させたばかりではなかった。広大な県域内の、自然条件などの少なからぬ差異を背景に、石川県会では土木費の配分をめぐり、越中出身議員と加賀・能登出身議員とのあいだで利害対立が生じた。越中側が七大河川の治水工事を求めたのに対して、加賀・能登側は道路改修などを主張したのである。

そこで、越中出身議員の米澤紋三郎・入江直友・藤井能三らを先頭に、分県運動が進められた。紋三郎は精根を傾けて「分県之建白」を起草。明治15年(1882)9月、入江直友とともに上京、岩倉具視、山県有朋、山田顕義らの政府要人に粘り強く陳情を重ねた。その結果、明治16年(1883)5月9日、太政官達が発せられ石川県からの分県が決定、富山県が誕生した。

新潟県あまいけ雨池開拓図 (外波村開墾地実測図)

明治カ

外波村とは、現在の新潟県糸魚川市外波のことだが、明治の頃の外波村は、唯一石灰が生産されるほかは「寒村にして、耕地少なく、また漁場に乏しく、生計はなほだ艱難」⁶な状態であった。村民は、石灰を越中へ運び、代わりに食糧や生活必需品を得るという形で生計を立てていたが、若者らは村を捨て出稼ぎに出るより仕方のない状況であった。

明治30年代後半より、これに危機感を覚えた村民たちの間で開墾が叫ばれるようになるが、資金と技術の面で問題にぶつかってしまう。そこで、事業を理解し援助をしてくれる指導者を求めることになり、当時国会議員として名を馳せていた9代目米澤紋三郎に白羽の矢が立つことになった。図中の雨池開拓地は村民の懇願に応じた紋三郎が自ら汗水を流し自費を通じて開拓した土地である。

米澤元健

〈明治15(1882)～昭和40年(1965)〉

米澤元健は、明治15年(1882)、9代目米澤紋三郎・とも夫妻の長男としてこの世に生をうけた。

米澤家は、地方の名家であり、代々その当主は、政治・経済・文化等、各方面で活躍しているが、元健も家の名にふさわしく様々な方面で活躍している。

特に、米相場に失敗し、多額の借金を抱えた父にかわり元健が当主となった明治38

⁶ 町史『青海—その生活と発展—』(昭和41年、青海町役場) p.877より

年（1905・元健23歳）からの活躍は顕著である。

元健は、明治時代末にはすでに現代のような青少年育成事業に目を向け、私財を投じて様々な形で積極的に事業の推進を図っているが、中でも特筆すべき事柄として、女性の自立を支援するための教育的事業を推進していたことがあげられる。大正期に入ると職業婦人が台頭してくるが、元健は時勢を見極める先見の明を持った人物だったということがこのことからわかる。

この他に、入善倉庫株式会社取締役、入善銀行株式会社取締役等を務める一方、入善町長（旧入善町、新入善町）や町会議員、県会議員等も歴任している。

事業家・政治家、様々な顔を持ち合わせ各方面で活躍した元健は、昭和39年（1964）、その功績が認められ勲五等双光旭日章を賜っている。

米澤元隆

〈大正4（1915）～昭和12年（1937）〉

米澤元健の長男。入善尋常高等小学校、富山県立神通中学校を経て、富山高等学校文学部第2学年在学中に病に倒れ、富山赤十字病院に入院療養中に死去。

参考文献

※『書名』（著・編者、発行年、発行者）の順に記載

入善町の歴史や米澤家について

『入善町誌』（入善町誌編纂委員会編、昭和42年、入善町役場）

『入善町史 通史編』（入善町史編さん室、平成2年、入善町）

『米澤紋三郎君略伝』（北溟漁夫、大正5年）

『葉』（田中忠一著・発行、昭和58年）

『入善町ところどころ』（昭和59年、森清松編・発行）

『富山県を築いた人びと』（富山県社会科教育研究会、昭和60年、旺文社）

『越中人譚 第39号 民権』（アキ編集室、チューリップテレビ、平成13年）

「越中先覚者列伝 第17話 米沢紋三郎翁」中山輝

（『富山と東京』第20巻第2号～第21巻第6号、昭和50年）

富山県の歴史

『富山県史』（昭和57年、富山県）

『富山大百科事典』（富山大百科事典編集事務局編、平成6年、北日本新聞社）

米澤家略系図

